天童

土田耕平

青空文庫

はげしい雨風の夜であります。山小屋の爺は、早く雨戸を立てゝ藁布団の中へもぐりこみました。枕もとには、うす暗い置ランプがともつてゐます。時をり戸のすき間から風が吹きこんで来て、ランプの灯はゆら〳〵と動きます。爺は寝床の中から細い象のやうな目つきで、危なく消えようとするあかりを眺めてゐました。

「もう消えてもいゝよ。」

と爺はつぶやきました。けれど、あかりは消えさうに見えてなか〳〵消えません。

ザワ〳〵ザワ〳〵と、山の木立は波が立ちさわぐやうな音をつゞけてゐます。風が強くなつて来ると、その音がゴオーと一色に集つて、滝でも落ちて来るやうに聞えます。このはげしい雨風の夜に、人里はなれた山の中に、たゞ一人きりでゐる爺の姿は、丁度風にゆらめくランプの灯のやうにたよりなく見えました。しかし爺の心は、外の物音とは打つて変つて静かにおちついてゐました。もう四十年あまり住みなれたこの山小屋は、爺にとつては、世界のどんな立派な御殿にも勝つて貴い新しいものでありました。

けれども爺は、今夜はなか〳〵眠れませんでした。目をとぢて雨風の音に聞き入つてゐますと、ゴオーと吹きよせる音は、火吹だるまが怒り出したやうにも聞えますし、また韋駄天が走つて来るやうにも思はれます。と忽ち、爺の目には韋駄天の姿があり〳〵と見えて来るのでした。韋駄天は毬栗頭で赤金色の顔で、目は恐ろしく吊りあがつて、手にはピカ〳〵光る剣を

持つてゐました。しかしこれは人を殺めるものではなく、仏さまの守護神であることを爺は知つてゐますので、ちつとも恐いとは思ひませんでした。韋駄天は天のはてからどし〳〵駈けてきて、爺の目のまへにぴつたり立ちふさがりました。爺はとぢてゐた目を一寸ばかり開いて見ました。と、韋駄天の姿は消えてしまつて、枕もとの置ランプが相変らずゆらゆらとしてゐるのでした。爺の頬にはやさしい笑みが浮びました。そしてまた両の目をしづかにつぶりました。

ゴオーと雨風の音がはげしくなつて、再び韋駄天の姿が見えて来ました。韋駄天はどし〳〵駈けてきて、爺のまへに立ちはだかりました。爺は今度は目をあきませんでした。かまはず韋駄天と向きあつてゐますと、韋駄天とばかり思つてゐましたのが、いつの間にかうつくしい女の姿に変つてゐました。ハテな、とよく見ますと、それは女ではなくて観音さまでした。爺は目をあきました。観音さまの姿は消えました。そして枕もとの置ランプが相変らずゆら〳〵としてゐました。

「もう消えてもいいよ。」

と爺はつぶやきました。しかし、あかりは消えさうに見えてなか〳〵消えませんでした。

爺はまた目をとぢました。しばらくたつと、ゴオーと雨風の音がはげしくなりましたので、また韋駄天が見えて来るかな、それとも観音さまかな、と思つてゐますと、こんどは、びんづらを結うた可愛らしい男の子があらはれました。男の子は遠くの空からむらさきの雲に乗つてきました。爺のまへへ来ると雲からとびおりて、身がるくそこらを駈けまはる様子が世間の子

どもとは全く変つてゐますので、よく見ますと、男の子の背にはうつくしい羽が生えてゐました。それは天童でした。爺は安心しました。そしてもう目をあかうとはしませんでした。天童が舞ひあるくたびに、あたゝかいやはらかい羽風が、爺の顔や髯にさはるのを感じました。

爺がこの山小屋へ住みこんだ時は、まだ二十あまりの若者でした。それが今はもう六十の坂をこえた白髪のお爺さんになりました。その長い間、爺は薪を伐つたり炭焼をしたりして、たゞ山を相手に暮してしまひました。妻も子もなく全くの一人ぼつちでした。人里遠く離れてゐますので、親しく行き来する人もありませんでした。

この爺にとつて、今までにたつた一人仲のよいお友だちがありました。それは草苅の少年でした。少年は毎日山小屋の近くへ草苅に来ました。そしてお昼のべんたうは、山小屋の炉で爺と一緒に食べました。爺はじぶんの子か孫のやうにして、この少年を可愛がりました。ところが、不幸なことに、少年は流行病のために急に亡くなつてしまひました。それは今から五年ほど前のことです。爺は忽ち年をとつて、腰はまがり髯は白くなりました。もう誰もお友だちはありませんでした。爺は観音さまを信仰して、亡くなつた少年――たつた一人のお友だちが、立派な天童になるやうにと朝に夕にお祈りをしました。そして、やがて自分も死んだ時、天童と一しよに観音さまの傍へ行きたいと思ひました。

爺は今夜はあり〳〵と観音さまを拝み、天童の姿をも見ましたので、すつかり安心しました。目がさめた時は、朝日の光が戸の隙からさしこんで、あらしは凪ぎてゐました。谷川の音がし

づかに耳にきこえました。爺はゆうべ消し忘れた枕(まくら)もとの置ランプを見ますと、いつの間にか灯(ひ)は消えてゐました。爺は手をのばして、ランプ壺(つぼ)を揺つて見ました。ランプは油が燃え尽きてしまつたので、あらしのために吹き消されたのではありませんでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第九巻」ほるぷ出版
　　1977（昭和52）年11月20日初刷発行
底本の親本：「蓮の実」古今書院
　　1926（大正15）年10月
初出：「童話」コドモ社
　　1923（大正13）年9月
入力：菅野朋子
校正：noriko saito
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天童

土田耕平

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/